ＺＯＯＭ発信テストに思うこと

酒井　董（ただ）美（よし）

来月七日からスタートする「山陰の民話とわらべ歌ミニオンライン講座」に備えて、ＤＶＤやＣＤなどうまく発信できるかどうかを試すためのテスト送信を、今月九日から毎晩八時より九時までの一時間行っている。

初めは受講希望者と単なる会話を楽しむ程度だったが、折角なら講座プログラムに予定していない資料を使い、民話一話、わらべ歌一曲をテキスト使用でするのもよかろうと十七日からそのようなやり方で行っている。

ところで、この講座を知ってもらうためのＰＲについては、これまで毎週火曜日に百名の知人に送る「島根の民話」などの定期便に併せて、エッセイに記しておいたら、それを伝え聞いた人々から、受講申し込みが次々と来て、現在二十名になっている。筆者が「山陰の」としているので、島根、鳥取の両県の受講者が主体になると考えていたのは、全くの見当違いだった。

二十名の希望者を今日現在東から見れば、東京三、千葉一、神奈川二、埼玉五、静岡一、岐阜一、奈良二、山口一、福岡一、そして地元島根三となり、期待していた隣県・鳥取の希望者は目下のところ〇である。

さて、当然のことながら、これはＺＯＯＭであるから、お互い顔を見ながら話ができるので、親しみも湧いてくる。中でも十年前まで小学校で音楽を教えていたという東京葛飾区にお住まいの山浦敬子氏は、最初から欠席なしであり、わらべ歌から民俗学など広い分野で質問が飛んでくるので楽しいことである。「江戸時代から伝承されているわらべ歌には、どんなのがありますか」「島根県に存在する狐つきとは、どんなものですか」「島根大学におられた溝上泰子という先生はどんな方でしたか」などが印象に残っているが、今夜もまた盛り上がることだろう。

まるで近所の親しい方と会話を楽しむような感じで交流できるから、ＺＯＯＭの効能は捨てがたい。中には「参加者一人ずつ民話を披露したらどうか」という提案もあったが、わらべ歌を中心で入っておられる方も多く、民話やわらべ歌と関係ない方もいるので、筆者としては「希望者は遠慮なくＺＯＯＭで民話やわらべ歌を披露して交流する」ということにしたら面白いのではないか、と思ったりしているところである。

テスト発信の目的の一つであるＤＶＤやＣＤを披露するのに、パソコンを二台駆使してうまく行くよう熟練したい。筆者にとってこの点だけが講座開始までに克服しなければならない課題であるが、間もなくそれも解決されることと考えている。

おかげでこの「ＺＯＯＭ発信テスト」から、講座成功への鍵がいろいろと見つかってくるのはありがたいことである。**（元島根大学法文学部教授）**

18日のＺＯＯＭ発信テストの一場面

ＺＯＯＭ発信テストによる 民話 わらべ歌 一日一話と一曲 6
2022年3月22日（火）20:00～21:30
酒井 董美

ネズミ浄土・隠岐郡隠岐の島町上郷久

語り手　大海忠敏さん（明治38年生まれ）

あるむかし

昔、あるところにな、じいさんとばあさんがおった。

「ばばよ、今夜は麦を餅搗かあや」

囲炉裏で焼き餅を焼き、麦いっぱい食ったげな。ところが、一つ残った。「ばば、食えな」「いいさ、食わっしゃいな」譲り合っていると囲炉裏の鍋の底に転がりこんだ。

じいさん、何かなげて、囲炉裏の鍋、このぐらいもぐって行ったが、途中に地蔵さんがおったと。「なんと、地蔵さん、ここを焼き餅が通ってもぐったのが？うん、よっき通ったわ？そうですか。

夜ネ地蔵さんがおっているのでご休憩の地蔵さんは「あんまりうるさげなもんだけどなあ、一口かじってやったれい」と言う。

じいさん、それからまた一生懸命で追っかけて行ったら、何やら音がする。

「鼠さや鼠さは
鼠かわりんだい、
スットンカタン、
スットンカタン。

と言って、ネズミが、転っていちょる。

じいさん、物陰から、

「ムーオーオーよーっ、何とネズミがおりびたまいことか。

「そも、鼠が老たっていうのか、みんな一目散に逃げていった。

後に日本がどっとう残って、ていさんはその米を日ゆらずいっぱで、帰ってきた。

これを聞いた、隣におった欲の深いことっぱぼが、「われわれも一つやってみるか！「うん、よかろネ」

囲炉裏の鍋の穴の中に焼き餅を入れてやった。

イラスト・猪本隆男

テスト発信の資料